

自然科学と歴史学に 「誤りのない知識」は存在するのか

金井由嗣

はじめに

聖書信仰に関する徹底した表明の一つである「聖書の無誤性に関するシカゴ声明（1978年）」は、聖書が歴史や科学の分野においても不可謬であり無誤であると主張する（「主張と否定の諸条項」第12項）¹。この議論は、神が聖書において、人間の言葉を用いて、真理を誤りなく啓示されたとの告白（第3～9項）に基づいており、「聖書は誤りのない神の言葉です」との福音的信仰告白の論理的帰結とみなされる。筆者は聖書を神のことばとして信じ受け入れる信仰告白の立場から、同声明の主張するところに基本的に同意する。

この声明で言及される「歴史と科学における無誤性」は、具体的な学問の営みにおいて実証可能なものとして扱われるべきだろうか。この実証が成立するためには、聖書の記述またはその特定の解釈が、歴史学や科学において「誤りのない事実」として確立した言説と一致することが必要である。歴史学や科学の側で「誤りのない事実」が確立していなければ、聖書の記述をそれと比較することがそもそも不可能となるからだ。

本論文では、現代の自然科学や歴史学をめぐる言説の中でこれらの学問における「事実」または「真理」がどのような性質のものとして扱われているかを、特に「自然科学や歴史学における知識は誤りのない事実とみなされ得るか」と

¹ 聖書神学舎教師会編『聖書信仰とその諸問題』（いのちのことば社、2017年）巻末付録vii頁

の観点から概観する。シカゴ声明本文には単に「科学」とあるものを「自然科学」と限定するのは、同声明本文においてこの言葉が社会科学の一分野である「歴史」と併記されていること、また特に「地球の歴史に関する科学的仮説」と「創造や洪水に関する聖書の教え」との関係が具体的実例として挙げられていることから、この声明での「科学」がもっぱら自然科学を指しているものと解釈することが妥当だからである。また諸科学の科学性に関する現代の議論は最初に自然科学と疑似科学の見分け方をめぐる議論から始まり、そこで確認された科学性の基準が他の学問分野に適用されていったという歴史を持つ。それゆえ、本論文でも最初に自然科学の科学性に関する議論を取り上げ、次にその科学性の議論を歴史学に適用したものを取り上げる。

本論文においては、問題の大枠をとらえて無誤性に関する議論の前提を整理することが目的であり、科学論・歴史学論それぞれの分野での細かい議論に立ち入る必要はない。また聖書学・自然科学・歴史学それぞれに関して専門性を有しない人の間でも共有できる土台を提供することが必要であると考え。それゆえ、本論文においては現代の科学論・歴史学論についての啓蒙的入門書を用いて議論の大枠を提示する。より専門的な内容を追求したい人のためには、ここで紹介する各書に挙げられている参考文献をたどることで十分その必要に答えられるものとする。

科学論については野家啓一『科学哲学への招待』（筑摩書房、2015年）を基本として用い、必要に応じてA.F.チャルマーズ『改訂新版 科学論の展開』（恒星社厚生閣、2013年）と伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』（名古屋大学出版会、2003年）をも参照する。歴史学については山本博文『歴史をつかむ技法』（新潮社、2013年）を紹介する。この場合の「科学性」については自然科学における議論が根本的に重要であり、歴史学の科学性については自然科学の営みとの共通性を確認すれば十分であるとする。

<梗概>

1、自然科学における知識とは

現代の科学論は、疑似科学と真の科学を区別する必要から始まった。カール・

ポパーは、科学を疑似科学から見分ける基準として「反証可能性」に着目し、これを科学性の基準とした。この立場によれば、科学上の確立した学説はすべて「繰り返し検証されたうえで、いまだ反証されていない仮説」であって、将来の反証の結果として別の理論に取って代わられる可能性を常に含んだものでなければならない。したがって、ポパーの反証主義に立つ限り、自然科学を「誤りのない真理」を記述する学問とみなすことはできない。

野家とチャルマーズはポパー以後の科学論の展開を注意深く検証し、説明する。ポパーの反証主義に対してはクワインやクーンによる批判があったが、疑似科学と科学を区別する基準としての反証可能性はいずれにせよ担保される必要があり、ポパーの理論を修正したラカトシュらの理論が現実の自然科学の営みを表す適切なモデルとして受容されている。また、ラカトシュとポラニーは検証を受け入れる科学者の倫理的態度をも重視し、科学が「人間のわざ」としての社会的・人格的側面を持つことを明らかにした。すなわち、ポパーの反証主義は、それを誠実に適用する科学者の態度をも考慮に入れた上で、自然科学における科学性の判断基準として有効である。

2、歴史学における科学性とは

山本は、「歴史学は科学なのか」という問題設定について、以下のように答える。歴史学には自然科学のような厳密な意味での再現可能性は存在しないが、史料の選択、史料批判、史料解釈のすべての過程をオープンにして他の研究者の追試を可能にし、新史料や新解釈によって自説が覆される条件を明示することで科学性が担保されている。したがって歴史学もまた「科学」である、とする。

この山本の所説においては、自然科学と同様の反証可能性の担保が歴史学の科学性の根拠である。したがって、歴史学においても学問上の所説はすべて「誤りのない真理」とはみなされ得ず、すべての確立した学説は「いまだ反証されていない仮説」である。

結論：自然科学と歴史学における真理性と聖書の真理性

自然科学と歴史学の両者において、学問上の言説はすべて「誤りのない知識」とはみなされ得ないことが以上から明らかとなった。それゆえ、聖書の記述とそれらの学問の所説との一致を求めることによって聖書から「歴史と科学の分野において誤りのない知識」を引き出す努力は、原理的に不可能である（このことは、日常的・常識的次元における聖書記述と諸科学の成果の一致を求める努力を無意味とするものではない）。自然科学と歴史学の所説は日々アップデートされ、変化することを前提としているのであって、その真理性と永遠の「神のことば」としての聖書の真理性とを同列に論じることとはできない。我々は「聖書は、歴史と科学の分野においても誤りのない神のことばである」との声明の適用を、学問上の所説の厳密な一致以外のところに求めなければならない。以上の提案をもって、本論文の結論とする。なお、聖書と科学との一致についての議論を整理するために、科学論の見地からいくつかの検討を加える。

<本論>

1、無誤性論争の焦点としてのシカゴ声明

(1)シカゴ声明の背景

シカゴ声明が生まれた背景については、藤本満『聖書信仰』²と鞭木由行「聖書信仰と無誤性」³に簡潔かつ的確な説明があるので、本論文に関係する範囲でそれを要約する。

神のことばである聖書を誤謬から守られた書物として信頼する姿勢は、古代教父以来キリスト教の歴史に広く認められるが、そのことを自覚的に表明することは 17 世紀のプロテスタント正統主義において顕著となり、ついで 19 世紀の古プリンストン神学と 19 世紀末から 20 世紀前半にかけての福音主義運動（この時点では「ファンダメンタリズム」とほぼ同義と言って良い⁴）の中で特

に強調された。これは新しく生まれた教理ではないが、近代以前には当然の前提であったものが、近代合理主義との対決を意識する中で特別に主題化されたものと考えてよい。

20 世紀半ばに生まれた「新福音主義」運動は、ファンダメンタリズムが世俗の学問に対して防御的・閉鎖的となってしまった反省を踏まえ、他の学問との対話に力を入れた。また程度の差はあれ、聖書批評学も受け入れていった。そのような中で 1962 年、フラー神学校が信仰告白から無誤性に関する条項を外した。この変更抗議した教授たちは同神学校を離れたが、その中の一人であったハロルド・リンゼルが 1976 年に『聖書のための戦い』(*The Battle for the Bible*)⁵を出版し、歴史や科学を含むあらゆる分野における聖書の無誤性を主張するとともに、この意味での無誤性を福音主義の試金石とすることを求めた。この流れの中で 1978 年に「聖書の無誤性に関する国際協議会」(International Conference for Biblical Inerrancy)が開かれ、268 名の神学者による 3 日間の会議の後に「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」が採択された⁶。

(2)シカゴ声明第 12 項の主張

シカゴ声明第 12 項の本文は以下の通りである。

聖書はその全体において無誤であり、いつわりや虚偽や欺きが一切ないことを私たちは主張する。

聖書が不可謬であり無誤であるのは、霊的な、宗教的な、あるいは救済的な主題に限られたことであって、歴史や科学の分野における主張は、その限りでないということを私たちは否定する。私たちはさらに地球の歴史に関する科学的仮説が創造や洪水に関する聖書の教えを超克するために用いられ

木保憲『アメリカ福音派の歴史—聖書信仰に見るアメリカ人のアイデンティティ』(明石ライブラリー、2012 年)を参照。

⁵ Harold Lindsell, *The Battle for the Bible* (Grand Rapids: Zondervan, 1976).

⁶ ICBI から公表された 3 声明(聖書の無誤性について、聖書解釈について、聖書の適用について)本文とそれらに関する公式解説文は、下記に収載されている。R. C. Sproul & N. L. Geisler, *Explaining Biblical Inerrancy* (Arlington: Bastion Books, 2013).

² 藤本満『聖書信仰—その歴史と可能性』(いのちのことば社、2015 年) 33-157 頁

³ 鞭木由行「聖書信仰と無誤性」『聖書信仰とその諸問題』280-292 頁

⁴ 福音主義とファンダメンタリズムの関係、及びそれらの内容の変遷については、宇田進『福音主義キリスト教とは何か』(いのちのことば社、1984 年) 33-46 頁、青

るのは正当でありうるということを否定する⁷。

鞭木由行「聖書は誤りなき神のことば—シカゴ声明再考」⁸は、同声明に関する優れた解説である。第12項についての鞭木の説明を引用する。

聖書の無誤性とは、否定的に定義するなら「いつわりや虚偽や欺きが一切ないこと」です。続く否定条項では、このような無誤性が無謬性とともにより聖書全体に及ぶことを具体的に主張しています。つまり無誤性は、ある特定の分野、つまり霊的宗教的・道徳的分野、あるいは救いに関する分野だけに限定されず、歴史や科学の領域までも含んで無誤であるということです。（中略） 実際問題として、歴史的事実の記述と霊的宗教的真理の記述を分離することは不可能です。それは聖書自身が真理を歴史的に提示しているという性格があるからです⁹。

12項は「地球の歴史に関する仮説」を、無誤性をテストする具体例として挙げる。

私たちはさらに地球の歴史に関する科学的仮説が創造や洪水に関する聖書の教えを超克するために用いられるのは正当でありうるということを否定する¹⁰。

この声明が特にこだわっているのは、「地球の歴史に関する仮説」であることが見て取れる。

⁷ 『聖書信仰とその諸問題』巻末付録 vii 頁

⁸ 『聖書信仰とその諸問題』330-353 頁

⁹ 『聖書信仰とその諸問題』346-347 頁

¹⁰ 『聖書信仰とその諸問題』巻末付録 vii 頁

(3) 「聖書の無誤性」とはいかなる論理で成立している主張なのか

鞭木由行「聖書信仰と無誤性」¹¹は、この問題の全体を概観する優れた論文である。あくまでも聖書信仰が中心であることを前提に、聖書信仰にとって無誤性の主張が必要不可欠であることを聖書自体、教会の歴史、神学全体の構造からの確に論じている。その論文の末尾で、鞭木は聖書信仰の基本的性格について以下のようにまとめている。

そして、これ（聖書信仰）は、積極的に告白すべき信仰箇条であるということ付記しておきたいと思います。クリスチャンが信じている三位一体論、受肉、贖罪などの基本的教理と同様に、聖書の靈感は一つのドグマです。私たちがその真理を理解しているからではなく、神がそのことをそのように論証している事柄です。それは科学的真理の言明ではなく、あくまで私たちの信仰の告白です。聖書はそれ自身で、神のことばであると証言しているからです。教会はその歴史を通してずっとその証を信じ、受け入れてきたのです¹²。

鞭木によれば、聖書信仰、及びその構成要素としての無誤性は、聖書それ自体とキリスト教の自己理解から演繹的に導かれる帰結である。神学の論理としては、これは完全に正当な方法である。筆者は一信仰者として鞭木の説明に心から納得し、賛同する。しかし、その神学の論理をもって「歴史と科学の分野における」正しさを主張することには一定の留保が必要であると考えます。自然科学と歴史学は、帰納的方法による実証を重んじる学問である。神学者が神学の演繹的論理によって「歴史と科学の分野における聖書の無誤性」を主張することは正当だが、その主張は科学者や歴史家と対話可能なものとなり得るのだろうか。それは神学者の独語となってしまうのだろうか。「科学や歴史の分野における聖書の無誤性」を、当の科学者や歴史研究者と対話可能な仕方論じるためには、それらの分野における真理概念と神学における真理概念との関係を正しく見極める必要があるように筆者には思われる。

¹¹ 『聖書信仰とその諸問題』260-300 頁

¹² 『聖書信仰とその諸問題』298 頁